

# 護持院原の敵討

森鷗外

青空文庫



播磨国はりまのくに 飾東郡しきとうごおり 姫路の城主酒井ひめじ 雅楽頭忠実うたのかみただみつ の上かみやしき 邸し は、  
 江戸城の大手向左角にあつた。その金部屋かねべや には、いつも侍さむらい が二  
 人ずつ泊ることになつていた。然しかるに天保四年癸巳てんぼう みずのぬ とし の歳十二月  
 二十六日の卯うの刻過すぎの事である。当年五十五歳になる、大金おおかねぶぎ  
 奉行山本三右衛門やう さんえもん と云う老人が、唯一ただ一人すわつている。ゆうべ  
 一しよに泊る筈はずの小金奉行こがね が病氣引びきをしたので、寂しい夜寒よさむを一  
 人で凌しのいだのである。傍そばには骨の太い、がっしりした行燈あんどうがあ  
 る。燈心に花が咲いて薄暗くなつた、橙黄色だいだいいろの火が、黎明しのめの  
 窓の明りと、等分に部屋を領している。夜具つづらはもう夜具葛籠つづらにし  
 まつてある。

障子の外に人のけはいがした。「申し。お宅から急用のお手紙が参りました」

「お前は誰たれだい」

「お表の小使でございます」

三右衛門は内から障子をあげた。手紙を持って来たのは、名は知らぬが、見識みしつた顔の小使で、二十はたちになるかならぬの若者である。

受け取つた封書を持って、行燈の前にすわつた三右衛門は、先ず燈心の花を落して掻かき立てた。そして懐ふところから鼻紙袋を出して、その中の眼鏡めがねを取つて懸かけた。さて上書を改めたが、伴宇平せがれの手でもなければ、女房にようぼうの手でもない。ちよいと首を傾けたが、

宛名には相違がないので、とにかく封を切った。手紙を引き出して披ひらき掛けて、三右衛門は驚いた。中は白紙である。

はつと思つたとたんに、頭を強く打たれた。又驚く間もなく、白紙の上に血がたらたらと落ちた。背後うしろから一刀浴せられたのである。

夜具葛籠の前に置いてあつた脇わきざし差を、手探りに取ろうとする所へ、もう二の太刀たちを打ち卸して来る。無意識に右の手を挙げて受ける。手首がぼったり切り落された。起ち上がって、左の手でむなぐらに掴つかみ着いた。

相手は存外卑ひきよう怯やつな奴であつた。むなぐらを振り放し科しなに、持しらはつていた白刃を三右衛門に投げ付けて、廊下へ逃げ出した。

三右衛門は思慮いとまの違もなく跡を追った。中の口まで出たが、もう相手の行方ゆくえが知れない。痛手を負った老人の足は、壮年の癖くせも者に及ばなかつたのである。

三右衛門は灼やけるような痛いたみを頭と手とに覚えて、眩暈めまいが萌きざして来た。それでも自分で自分を励まして、金部屋かねべやへ引き返して、何より先に金箱の錠前を改めた。なんの異状もない。「先ず好かつた」と思った時、眩暈めまいが強つく起こつたので、左の手で夜具葛籠くわらごを引き寄せて、それに靠より掛かつた。そして深い緩ゆるい息を衝ついていた。

物音を聞き附けて、最初に駆け附けたのは、泊番の徒目かちめつけ附つけで

あつた。次いで目附が来る。大目附が来る。本締もとじめが来る。医師を呼びに遣るや。三右衛門の妻子のいる蠣殻町かきがらちようの中なか邸やしきへ使が走つて行く。

三右衛門は精神たしかが慥たしかで、役人等に問われて、はつきりした返事をした。自分には意趣遺恨を受ける覚おぼえは無ない。白紙の手紙を持つて来て切つて掛かつた男は、顔を知つて名を知らぬ表小使である。多分金銀のぞみに望かを繫かけたものである。家督相統よろの事を宜よろしく頼む。敵かたきを討うつてくれるように、倅もろに言つて貰もらいたいと云うのである。その間三右衛門は「残念だ、残念だ」と度々たびたび繰り返して云つた。現場げんばに落ちていた刀は、二三日前作事の方に勤めていた五瀬某が、詰所つめしよに掛けて置いたのを盗まれた品であつた。門番を調べ

てみれば、卯刻過うのこくに表小使かめぞう亀藏と云うものが、急用のお使だと云つて通用門を出たと云うことである。亀藏はかんだきゆうえもんち神田久右衛門町よう代地の仲間ちゆうげんくちいれやど口入宿したうげやど富士屋治三郎が入れた男で、二十歳になる。下請宿わかさやは若狭屋亀吉である。表小使亀藏が部屋を改めて見れば、山本の外四人の金部屋役人に、それぞれ宛てた封書があつて、中は皆白紙である。

察するに亀藏は、早晚泊番の中の誰かたれを殺して金を盗もうと、兼かねて謀はかつていたのであろう。奥羽おううその外の凶きようけん歉けんのために、江戸は物価の騰貴した年なので、心得こころえちがえ違ちがひのものが出来たのであろうと云うことになつた。天保四年は小売米こくりまい百文に五合五勺になつた。天明てんめい以後の飢饉ききんどし年である。



医師が来て、三右衛門に手当をした。

親族が駆け附けた。蠣殻町の中邸から来たのは、三右衛門の女房と、伴宇平とである。宇平は十九歳になつてゐる。宇平の姉りよは細川 ながとのかみおきたけ 長門守興建の奥に勤めていたので、豊島町 としまちよう の細川邸から来た。当年二十二歳である。三右衛門の女房は後 のちぞい 添で、りよと宇平とのためには継母である。この外にまだ三右衛門の妹で、小倉新田 こくらしんでん の城主小笠原備後守貞謙 おがさわらびんごのかみさだよし の家来原田某 けらい の妻になつて、麻布日 あさぶひ が窪 くぼ の小笠原邸にゐるのがあるが、それは間に合わないで、酒井邸には来なかつた。

三右衛門は医師が余り物を言わぬが好いと云うのに構わず、女房子供にも、役人に言つたと同じ事を繰り返して言つて聞せた。

蠣殻町の住いは手狭で、介抱が行き届くまいと言うので、浜町そえやしき添かんべ邸の神戸某方で、三右衛門を引き取るように沙汰さたせられた。これは山本家の遠い親しんせき戚である。妻子はそこへ附き添って往つた。そのうちに原田の女房も来た。

神戸方で三右衛門は二十七日の寅とらの刻に絶命した。

その日の酉とりの下刻げこくに、上かみやしき邸から見分けんぶんに来た。徒目附、小びと人目附等に、手附てつけが附いて来たのである。見分の役人は三右衛門の女房、伴宇平、娘りよの口書くちがきを取った。

役人の復命よに依つて、酒井家から沙汰があつた。三右衛門が重おも手もてを負いながら、癿者を中の口まで追つて出たのは、「平へい生せいの

こころえかたよろしき  
心得方宜に附、格式相当の葬儀可取行」と云うのである。三右衛門の創きずを受けた現場にあつた、癩者の刀は、役人の手で元の持主五瀬某に見せられた。

二十八日に三右衛門の遺骸いがいは、山本家の菩提所浅草堂前の遍へ立寺んりゆうじに葬られた。葬を出す前に、神戸方で三右衛門が遭難當時に持っていた物の始末をした時、大小も当然倅宇平が持つて帰る筈であつたが、娘りよは切に請うて脇差を譲り受けた。そして宇平がそれを承諾すると、泣き腫はらしていた、りよの目が、刹那せつなの間喜よろこびにかがやいた。

侍が親を殺害せつがいせられた場合には、敵討かたきうちをしなくてはなら

ない。ましてや三右衛門が遺族に取つては、その敵討が故人の遺言になつてゐる。そこで親族打ち寄つて、度々評議を凝らした末、翌天保五年甲午きのえうまの歳の正月中旬に、表向敵討の願をした。

評議の席で一番熱心に復讐ふくしゆうがしたいと言ひ続けて、成功を急いで氣を苛いらつたのは宇平であつた。色の蒼あおい、瘠やせた、骨細の若者ではあるが、病身ではない。姉のりよは始終黙つて人の話を聞いていたが、願書に自分の名を書き入れて貰うことだけは、きつと居直つて要求した。りよは十人並の容貌ようぼうで、筋肉の引き締まつた小女こおんなである。未亡人は頭痛持でこんな席へは稀まれにしか出て来ぬが、出て来ると、若し返討かえりうちなどに逢あひはすまいかと云う心配ばかりして、果はてはどうしてこんな災難に遇つたことかと繰

り返してくどくのであった。日が窪から来る原田夫婦や、未亡人の実弟桜井須磨右衛門は、いつもそれを慰めようとして骨を折った。

然るにここに親戚一同がひどく頼みに思っている男が一人いる。この男は本国姫路にいたので、こう云う席には列することが出来なかつたが、訃音ふいんに接するや否や、弔慰くやみの状をよこして、敵討にはきつと助太刀をすると誓つたのである。姫路ではこの男は家老本多意気揚いきりに仕えている。名は山本九郎右衛門と云つて当年四十歳になる。亡くなつた三右衛門がためには、九つ違の実弟である。

九郎右衛門は兄の訃音を得た時、すぐに主人意気揚に願書を出

した。甥おい、女姪めいが敵討をするから、自分は留守を伴健蔵まかに委せて置いて、助太刀に出たいと云うのである。主人本多意気揚は徳川家康が酒井家に附けた意気揚の子孫で、武士道に心こころ入いれの深い人なので、すぐに九郎右衛門の願を聞き届けた。江戸ではまだ敵討の願を出したばかりで、上かみからそんな沙汰もないうちに、九郎右衛門は意気揚から拵こしらえつき附つきの刀一腰ひとこしと、手当金二十両とを貰つて、姫路を立つた。それが正月二十三日の事である。

二月五日に九郎右衛門は江戸蠣殻町の中邸にある山本宇平が宅に着いた。宇平を始はじめ、細川家から暇いとまを取って帰っていた姉のりよよろこびとが喜よろこびは譬たとえようがない。沈着あんどで口数をきかぬ、筋骨たぐま逞たくましい叔父おじを見たばかりで、姉も弟も安堵あんどの思をしたのである。

「まだこつちではお許は出んかい」と、九郎右衛門は宇平に問うた。

「はい。まだなんの御沙汰もございません。お役人方に伺いました。多分忌中だから御沙汰がないのだろうと申すことで」

九郎右衛門は眉間みげんに皺しわを寄せた。暫しばらくして、「大きい車は廻りが遅いのう」と云った。

それから九郎右衛門は、旅の支度が出来たかと問うた。いずれお許が出てからと、宇平が云った。叔父の眉間には又皺が寄った。しかし今度は長い間なんとも言わなかった。外の話の色々した後で、叔父は思い出したように云った。「あの支度はもう、先へして置いても好いぞよ」

六日には九郎右衛門が兄の墓参をした。七日には浜町の神戸方へ、兄が末期まつごに世話になった礼に往った。西北の風の強い日で、丁度九郎右衛門が神戸の家にいるうちに、神田から火事が始まった。歴史に残っている午うまどし年の大火である。未ひつじの刻に佐久間町二丁目の琴三味線師の家から出火して、日本橋方面へ焼けひろがり、翌朝卯の刻まで焼けた。「八つ時分三味線屋からことを出し火の手がちりてとんだ大火事」と云う落首があつた。浜町も蠣殻町もかざした風下で、火の手は三つに分かれて焼けて来るのを見て、神戸の内は人出も多いからと云つて、九郎右衛門は蠣殻町へ飛んで帰つた。

山本の内では九郎右衛門が指図をして、荷物は残らず出させた



が、申まをの下刻には中邸一面が火になって、山本も焼けた。

りよは火事が始まるとすぐ、旧主人の細川家の邸をさして駆けて行つたが、もう豊島町は火になっていた。「あぶないあぶない」  
「姉さん火の中へ逃げちやあいけねえ」などと云うものがある。  
とうとう避難者や弥次馬やじうま共の間に挟はさまれて、身動みうごぎもならぬようになる。頭の上へは火の子がばらばら落ちて来る。りよは涙ぐんで亀井町の手前から引き返してしまった。内へはもう叔父が浜町から歸つて、荷物を片付けていた。

浜町も矢の倉に近い方は大部分焼けたが、幸さいわいに酒井家の添邸は焼け残つた。神戸家へ重かさねがさね々々世話になるのは気の毒だと云うので、宇平一家はやはり遠い親戚に当る、添邸の山本平作方へ、八

日の辰たつの刻過に避難した。

三右衛門が遺族は山本平作方の部屋を借りて、夢の中で夢を見るような心持になって、ぼんやりしている。未亡人は頭痛が起つて寝たきりである。宇平は腕組をして何やら考え込む。只ただりよ一人平作の家族に気兼きがねをしながら、甲斐か々々がしく立ち働いていたが、午ひるごろ頃ころになつて細川の奥方の立退所たちのきじよが知れたので、すぐに見舞まゐりに往つた。

晩にりよが帰ると九郎右衛門が云つた。「おい。もう当分我々は家なんぞはいらんが、若殿が旅に出て風を引かぬように、支度だけはして遣やらんではならんぞ」叔父は宇平を若殿々々と呼んで

押揄おしからかっているのである。

「はい」と云つたりよは、その晩から宇平の衣類に手を着けた。

九日にはりよが旅支度にいる物を買ひに出た。九郎右衛門が書附にして渡したのである。きようは風が南に變つて、珍らしく暖いと思つていると、酉とりの上刻に又檜物町ひものちようから出火した。おとつい焼け残つた町家まちやが、又この火事で焼けた。

十日には又寒い西北の風が強く吹いていると、正午に大名だいまみようこ小路うじの松平伯耆守宗発まつだいらほうきのかみむねあきらの上邸から出火して、京橋方面から芝口へ掛けて焼けた。

続いて十一日にも十二日にも火事がある。物価の高いのに、災難が引き続きであるので、江戸中心きようきよう恟々きようきようとしている。山本

方で商人に注文した、少しばかりの品物にも、思い掛けぬ手違てちがえが出来て、りよが幾ら氣を揉もんでも、支度がなかなかはかどらない。

或る日九郎右衛門は烟草たばこを飲みながら、りよの裁縫するのを見ていたが、不審らしい顔をして、烟管きせるを下に置いた。「なんだい。そんなちつぽけな物を拵こしらえたつて、しようがないじゃないか。若殿はのつぽでお出いでになるからなあ」

りよは顔を赤くした。「あの、これはわたくしので」縫っているのは女の脚絆きやはんこう甲掛がけである。

「なんだと」叔父は目を大きく睜みはつた。「お前も武者修業に出るのかい」

「はい」と云つたが、りよは縫物の手を停とめない。

「ふん」と云つて、叔父は良久やぶさしく女姪めいの顔を見ていた。そしてこう云つた。「そいつは駄目だ。お前のような可哀らしい女の子を連れて、どこまで往くか分からん旅が出来るものか。敵かたきにはどこで出逢うか、何年立つて出逢うか、まるで当あてがないのだ。己おれと宇平とは只それを捜しに行くのだ。見附かつてからお前に知らせれば好いいじゃないか」

「仰おっしやる通とおり、どこでお逢になるか知れませんが、きつと江戸へお知らせになることが出来ましようか。それに江戸から参るのを、きつとお待になることが出来ましようか」罪のないような、狡こうか猾つらしいような、くりくりした目で、微笑を帯びて、叔父の顔

をじつと見た。

叔父は少からず狼狽ろうばいした。「なる程。それは時と場合とに依る事で、わしもきつとは云い兼ねる。出来る事なら、どうにでもしてお前をその場へ呼んで遣るのだ。万一間に合わぬ事があつたら、それはお前が女に生れた不肖ふしょうだと、諦あきらめてくれるより外ない」

「それ御覽遊ばせ。わたくしはどうしてもその万一の事のないようにいたしとうございます。女は連れて行かれぬと仰やるなら、わたくしは尼になつて参ります」

「まあ、そう云うな。尼も女じゃからのう」

りよは涙を縫物の上に落して、黙っている。叔父は一面詞ことばを尽

して慰めたが、一面女は連れて行かぬと、きつぱり言い渡した。りよは涙を拭ふいて、縫いさした脚絆をそつと側そばにあつた風呂敷ふろしきづつ包みの中みにしまった。

酒井忠実かがのかみたださねは月番老中大久保加賀守忠真とどげずみと三奉行とに届とど濟ずみ

の上で、二月二十六日附を以もつて、宇平、りよ、九郎右衛門の三人

に宛てた、大目附連署の証文を渡して、敵討を許した。「早々本

意を達したちかへるべし可立もし帰、若又敵人死しにさくら候はば、慥たしかなる証拠を以もつて

可まをしたつべし申立」と云う沙汰である。三人には手当が出る。留守へは

扶持ふちが下がる。りよはお許は出ても、敵を捜しには旅立たぬこと

になつて見れば、これで未亡人とりよとの、江戸での居いどころ所ころさえ

極めて置けば、九郎右衛門、宇平の二人は出立することが出来るのである。

りよは小笠原邸の原田夫婦がひとまず先引き取るようになった。病身な未亡人は願ねがいずみ濟すけの上で、里方桜井須磨右衛門の家で保養することになった。

さていよいよ九郎右衛門、宇平の二人が門出をしようとしたが、二人共敵の顔を識らない。人相書だけをたよりにするのは、いかにも心細いので、口入宿の富士屋や、請うけやど宿の若狭屋へ往つて、色々問い質ただしたが、これと云う事実も聞き出されない。それに容貌が分からぬばかりでなく、生国も紀州だとは云っているが、確しかとしたことは分からぬらしい。只酒井家に奉公する前には、上州



高崎にいたことがあると云うだけである。

その時、山本平作方へ突然尋ねて来た男がある。この男は近おうみ江国のくに浅井郡うまれの産で、少わかい時に江戸に出て、諸家に仲ちゆうげん間奉公をして、丁度亀蔵と一しよに酒井家の表小使をして、三右衛門には世話になつたこともあるので、若しお役に立つようなら、幸さいわい今は酒井家から暇いとまを取っているから、敵の見識みしりにん人として附いて行つても好よいと云うのである。名は文吉と云つて、四十歳になる。体は丈夫で、渡わた者りものの仲間には珍らしい、実直なものだと云うことが、一目見て分かつた。

九郎右衛門が会つて話をして見て、すぐに宇平の家来に召しかし抱かえることにした。

九郎右衛門、宇平、文吉の三人は二十九日に菩提所遍立寺から出立することに極めて、前日に浜町の山本平作方を引き払って、寺へ往つた。そこへは病気のまだ好くならぬ未亡人の外、りよを始、親戚一同が集まつて来て、先ず墓参をして、それから離別の盃さかずきを酌かわみ交した。住持はその席へ蕎麦そばを出して、「これは手討のらん切ぎりでございます」と、茶番めいた口上を言った。親戚は笑い興じて、只一人打ち萎しおれているりよを促し立てて帰つた。

寺に一夜ひとよ寝て、二十九日の朝三人は旅に立つた。文吉は荷物を負つて一步跡を附いて行く。亀蔵が奉公前にいたと云うのをたよりにして、最初上野国こうずけのくに高崎をさして往くのである。

九郎右衛門も宇平も文吉も、高崎をさして往くのに、亀蔵が高崎にいそうだと云う気にはなっていない。どこをさして往こうと云う見当が附かぬので、先ず高崎へでも往つて見ようと思うに過ぎない。亀蔵と云う、無頼漢とも云えば云われる、住所不定の男のありかを、日本国中で捜そうとするのは、米倉の中の米粒一つを捜すようなものである。どの俵に手を着けて好いか分からない。然しそれ程の覚おぼつか束おぼつかない事が、一方から見れば、是非共しと為遂しとげなくてはならぬ事である。そこで一行は先ず高崎と云う俵をほどいて見ることにした。

高崎ではそうせき踪跡そうせきが知れぬので、前橋へ出た。ここにはえのきまち榎町えのきまちの政淳寺せいじゆんじに山本家の先祖の墓がある。九郎右衛門等はそれに参

つて成功を祈つた。そこから藤岡に出て、五六日いた。そこから武蔵国の境を越して、児玉村に三日いた。三峯山に登つては、三峯権現に祈願を籠めた。八王子を経て、甲斐国に入つて、郡内、甲府を二日に廻つて、身延山へ参詣した。信濃国では、上諏訪から和田峠を越えて、上田の善光寺に参つた。越後国では、高田を三日、今町を二日、柏崎、長岡を一日、三条、新潟を四日で廻つた。そこから加賀街道に転じて、越中<sup>えちごの</sup>国に入つて、富山に三日いた。この辺は凶年の影響を蒙ること<sup>こうむ</sup>が甚しくて、一行は麦に芋大根を切り交ぜた飯を食つて、農家の土間に筵を敷いて寝た。飛騨国では高山に二日、美濃国では金山<sup>かなやま</sup>に一日いて、木曾路を太田に出た。尾張国では、犬山に

一日、名古屋に四日いて、東海道を宮に出て、佐屋を経て伊勢いせのく国くにに入り、桑名、四日市、津を廻り、松坂に三日いた。

一行が二日以上泊るのは、稀に一日の草くたびれやすみ臥休やすみをすることもあるが、大抵何か手掛りがありそうに思われるので、特別搜索をするのである。松坂では殿町に目代もくだい岩橋某と云うものがいて、九郎右衛門等の言うことを親切に聞き取って、綿密な調べをしてくれた。その調べ上げた事実を言つて聞せられた時は、一行は暗中ともしびに燈火を認めたとような気がしたのである。

松坂に深野屋佐兵衛と云う大商人おおしやうじんがある。そこへは紀伊きののく国くに熊野浦くまのうら長島外町の漁師定右衛門さだえもんと云うものが毎日魚うおを送つて

よこす。その縁で佐兵衛は定右衛門一家と心安くなっている。然るに定右衛門の長男亀蔵は若い時江戸へ出て、音信不通になつたので、二男定助一人をたよりにしている。その亀蔵が今年正月二十一日に、檻樓ぼろを身に纏まとつて深野屋へ尋ねて来た。佐兵衛は「お前のような不孝者を、親父様おやしさまに知らせずに留めて置く事は出来ぬ」と云つた。亀蔵はさすが深野屋の店を立ち去つたが、それを見たものが、「あれは紀州の亀蔵と云う男で、なんでも江戸で悪い事をして、逃げて来たのだらう」と評判した。

後に深野屋へ聞えた所に依ると、亀蔵は正月二十四日に、熊野仁郷村にんごうむらにいるははかたの小父林助の家に来て、置いてくれと頼んだが、林助は貧乏していて、人を置くことが出来ぬと云つて、

勧めて父定右衛門が許へ遣つた。知人にたよろうとし、それが慍  
わぬ段になつて、始めて親戚をおとずれ、親戚にことわられて、  
亀蔵はようよう親許へ帰る氣になつたらしい。定右衛門の家には  
二十八日に歸つた。

二月中旬に亀蔵は江戸で悪い事をして歸つたのだらうと云う噂  
が、松坂から定右衛門の方へ聞えた。定右衛門が何をしたかと問  
うた時、亀蔵は目上の人に創を負わせたと云つた。そこで定右衛  
門と林助とで、亀蔵を坊主にして、高野山に登らせることにし  
た。二人が剃髪した亀蔵を三浦坂まで送つて別れたのが二月十  
九日の事である。亀蔵はその時茶の弁慶縞の木綿綿入を着て、  
木綿帯を締め、藍の股引を穿いて、脚絆を当てていた。懷中に

は一両持っていた。

亀蔵は二十二日に高野領清水村の又兵衛と云うものの家に泊つて、翌二十三日も雨が降ったので滞留した。そして二十四日に高野山に登った。山で逢ったものもある。二十六日の夕方には、下山して橋本にいたのを人が見た。それからは行方不明になっている。多分四国へでも渡ったかと云うことである。

松坂の目代にこの顛てんまつ末まつを聞いた時、この坊主になつた定右衛門の伴亀蔵が敵だと云うことに疑はたを挾はさむものは、主従三人の中うちに一人もなかつた。宇平はすぐに四国へ尋ねに往こうと云つた。しかし九郎右衛門がそれを止めて、四国へ渡つたかも知れぬと云う



のは、根拠のない推量である、四国へもいずれ往くとして、先ず手近な土地から捜すが好いと云つた。

一行は松坂を立つて、武運を祈るために参宮した。それから関を経て、東海道を摂津国大阪に出て、ここに二十三日を費した。その間に松坂から便があつて、紀州の定右衛門が伴の行末を心配して、氣病で亡くなつたと云う事を聞いた。それから西宮、兵庫を経て、播磨国に入り、明石から本国姫路に出て、魚町の旅宿に三日いた。九郎右衛門は伴の家があつても、本意を遂げるまでは立ち寄らぬのである。それから備前国に入り、岡山を経て、下山から六月十六日の夜舟に乗つて、いよいよ四国へ渡つた。松坂以来九郎右衛門の搜索方鍼ほうしんに対して、稍やや不満ら

しい気色を見せながら、つまりは意志の堅固な、機嫌にうきしずみ浮沈のない叔父に威圧せられて、附いて歩いていた宇平が、この時急に活気を生じて、船中で夜の更ふけるまで話し続けた。

十六日の朝舟はさぬきのくにまるがめ讚岐国丸亀さぬきのくにまるがめに着いた。文吉に松尾を尋ねさ

せて置いて、二人は象頭山ぞうずさんへ祈願に登った。すると参籠人さんろうにんが

丸亀で一癖ありげな、他所者たしよものの若い僧を見たと言ふ話をした。

宇平はもう敵を見附けたような気になって、亥いの刻に山を下った。丸亀に帰って、文吉を松尾から呼んで僧を見させたが、それは別人であつた。

伊予国いよのくにの銅山は諸国の悪者の集まる所だと聞いて、一行は銅

山を二日捜した。それから西条に二日、小春こはる、今治いまばりに二日いて、

松山から道後の温泉に出た。ここへ来るまでに、暑あつさを侵おかして旅行をした宇平は留飲りゅういん疝せん通つうに悩み、文吉も下痢げりして、食事が進まぬので、湯町で五十日の間保養した。大分体が好くなつたと云つて、中大洲なかおおすを二日捜して、八幡浜やはたはまに出ると、病後を押して歩いた宇平が、力抜けがして煩わづらつた。そこで五日間滞留して、ようよう九州行の舟に乗ることが出来た。四国の旅は空むなしく過ぎたのである。

舟は豊後ぶんご国佐賀関さかのせきに着いた。鶴崎つるさきを経て、肥後ひご国に入り、阿蘇山あそさんの阿蘇神宮、熊本の清正せいしょう公こうへ祈願せいごんに参つて、熊本と高橋とを三日ずつ捜して、舟で肥前ひぜん国島原しまはらに渡つた。そこに

二日いて、長崎へ出た。長崎で三日目に、敵らしい僧を島原で見たと云う話を聞いて、引き返して又島原を五日尋ねた。それから熊本を更に三日、宇土を二日、八代やつしろを一日、南工宿なんくじゆくを二日尋ねて、再び舟で肥前国温泉嶽おんせんだけの下の港へ渡った。すると長崎から来た人の話に、敵らしい僧の長崎にいることを聞いた。長崎上か筑後町みちくごまちの一向宗いつこうしゅうの寺に、勧善寺と云うのがある。そこへ二十歳前後の若い僧が来て、棒を指南していると云うのである。一行は又長崎行の舟に乗った。

長崎に着いたのは十一月八日の朝である。舟引地町ふなひきじまちの紙屋と云う家に泊つて、町年まちどしより寄福田某たずねにんに尋人の事を頼んだ。ここで聞けば、勧善寺の客僧はいよいよ敵らしく思われる。それは紀

州産うまれのもので、何か人目を憚はばかるわけがあると云つて、門外不出で暮くしていると云うのである。親切な町年寄は、若し取り逃がしてはならぬと云つて、盗賊方二人にんを同行させることにした。町で剣術師範けんじつをしている小川某と云うものも、町年寄の話を聞いて、是非その場に立ち会つて、場合に依つては助太刀がしたいと申し込んだ。

九郎右衛門、宇平の二人は、大村家の侍で棒の修行を懇望こんぼうするものだと云つて、勧善寺に弟子入の事を言い入れた。客僧は承引しやういんして、あすの巳みの刻ときに面会しようと云つた。二人は喜び勇んで、文吉を連れて寺へ往く。小川と盗賊方の二人とは跡あとに続く。さて文吉に合図あひづを教おしえて客僧に面会して見ると、似も寄らぬ人であつ

た。ようようその場を取り繕つて寺を出たが、皆忌々しがる中に、宇平は殊に落胆した。

一行は福田、小川等に礼を言つて長崎を立つて、大村に五日いて佐賀へ出た。この時九郎右衛門が足痛を起して、杖を衝いて歩くようになった。筑後国では久留米を五日尋ねた。筑前国では先ず大宰府天満宮に参詣して祈願を籠め、博多、福岡に二日いて、豊前国小倉から舟に乗つて九州を離れた。

ながとのくに

長門国下関に舟で渡つたのが十二月六日であつた。雪は降つて来る。九郎右衛門の足痛は次第に重るばかりである。とうとう宇平と文吉とで勧めて、九郎右衛門を一旦姫路へ帰すことにし

た。九郎右衛門は渋りながら下関から舟に乗って、十二月十二日の朝播磨国室津むろのつに着いた。そしてその日のうちに姫路の城下平ひらの町まちの稲田屋に這入はいった。本意を遂げるまでは、飽くまでも旅中の心得でいて、倅の宅には帰らぬのである。

宇平は九郎右衛門を送つて置いて、十二月十日に文吉を連れて下関を立つた。それから周防国宮市すおうのくにに二日いて、室積むろづみを経て、岩国の錦帯橋へ出た。そこを三日搜して、舟で安芸国宮島あきのくにへ渡つた。広島に八日いて、備後国びんごのくにに入り、尾の道、鞆ともに十七日、福山に二日いた。それから備前国岡山を経て、九郎右衛門の見舞かたがた旁かたがた姫路に立ち寄つた。

宇平、文吉が姫路の稲田屋で九郎右衛門と再会したのは、天保

六年乙未きのとひつじの歳正月二十日であつた。丁度その時広岸こうがん（広峯）山の神さん主谷口某と云うものが、怪しい非人の事を知らせてくれたので、九郎右衛門が文吉を見せに遣つた。非人は石見産いわみうまれだと言つていた。人に怪まれるのは脇差を持つていたからであつた。しかし敵ではなかつた。

九郎右衛門の足はまだなかなか直らぬので、宇平は二月二日に文吉を連れて姫路を立て、五日に大阪に着いた。宿は阿波座あわざおくひ町の撰津国屋つのくにやである。然るに九郎右衛門は二人を立たせてから間もなく、足が好くなつて、十四日には姫路を立て、明石から舟に乗つて、大阪へ追いかけて往つた。



三人は摂津国屋に泊つて、所々を尋ね廻るうちに、路銀が尽きそうになった。そこで宿屋の主人の世話で、九郎右衛門は按摩あんまになり、文吉は淡島あわしまの神主になった。按摩になったのは、柔術の心得があるから、按摩の出来ぬ筈はないと云うのであつた。淡島の神主と云うのは、神社で神に仕えるものではない。胸に小さい宮を懸けて、それに紅もみで縫つた括くくりぎ猿などを吊り下げ、手に鈴を振つて歩く乞食こじきである。

その時九郎右衛門、宇平の二人は文吉に暇いとまを遣ろうとして、こゝう云つた。これまでも我々は只お前と寝食を共にすると云うだけで、給料と云うものも遣らず、名のみ家来にしていたのに、お前は好く辛抱して勤めてくれた。しかしもう日本全国をあらかた遍

歴して見たが、敵はなかなか見附からない。この按排あんばいでは我々が本意を遂げるのは、いつの事か分らない。事によつたらこのまうらみま恨を呑んで道路にのたれ死をするかも知れない。お前はこれまことばで詞で述べられぬ程の親切を尽してくれたのだから、どうもこの上一しよにいてくれとは云い兼ねる。勿論敵の面体めんていを見識らぬ我々は、お前に別れては困るに違ないが、もはや是非に及ばない。只運を天に任せて、名告りなの合う日を待つより外はない。お前は忠実この上もない人であるから、これから主取しゅうどりをしたら、どんな立身も出来よう。どうぞここで別れてくれと云うのであつた。

九郎右衛門は兼て宇平に相談して置いて、文吉を呼んでこの申も

渡うしわたしをした。宇平は側そばで腕組をして聞いていたが、涙は頬を伝つて流れていた。

黙つて衝つつ伏ふして聞いていた文吉は、詞の切れるのを待つて、頭を擡もたげた。睜みはつた目は異様に赫かがやいている。そして一声「檀那だんな、それは違います」と叫んだ。心は激して詞はしどろであつたが、文吉は大凡おおよそこんなことを言つた。この度たびの奉公は当あたりまえ前の奉公ではない。敵討の供に立つからは、命はないものである。お二人が首尾好く本意を遂げられれば好し、万一敵に多勢の悪者でも荷担して、返かえりうち討うちにでも逢われれば、一しよに討たれるか、その場を逃れて、二重の仇あだを討つかの二つより外ない。足腰の立つ間は、よしやお暇が出て、影の形に添うように離れぬと云うの

であつた。

さすがの九郎右衛門も詞の返しようがなかつた。宇平は蘇よみがえつたおmoi思をした。

それから三人が摂津国屋を出て、木賃宿きちんやどに起おき臥ふしすることになつた。もうどこをさして往つて見ようと云う所もないので、只已やむに勝まさる位の考で、神仏の加護を念じながら、日ごとに市中を徘徊はいかいしていた。

そのうち大阪に咳がいぎやく逆さかが流行して、木賃宿も咳せきをする人だらけになつた。三月の初に宇平と文吉とが感染して、熱を出して寝た。九郎右衛門は自分の貰つた錢で、三人が一口ずつでも粥かゆを啜すするようになつていた。四月の初に二人が本復すると、こん度は九郎

右衛門が寝た。体は巖がんじょう 畳じようでも、年を取っているので、容よう体たいが二人より悪い。人の好い医者を頼んで見て貰うと、傷しょう寒かんだと云った。それは熱が高いので、譚うわごと語ことに「こら待て」だの「逃がすものか」だのと叫んだからである。

木賃宿の主人が迷惑がるのを、文吉が宥なだめ賺すかして、病人を介抱しているうちに、病やみつぎ附つきの急劇であつたわりに、九郎右衛門の強ひかすい体は少い日数で病氣に打ち勝った。

九郎右衛門の恢かい復ふくしたのを、文吉は喜んだが、ここに今一つの心配が出来た。それは不断から機嫌の変やすわり易やすい宇平が、病後きわだに際立きわだつて精神の変調を呈して来たことである。

宇平は常はおとなしい性たちである。それにどこか世馴れぬぼんやりした所があるので、九郎右衛門は若殿と綽号あだなを付けていた。しかしこの若者は柔い草葉の風に靡なびくように、何事にも強く感動する。そんな時には常つね蒼あおい顔に紅くれないが潮いちようして来て、別人のように能弁になる。それが過ぎると反動が来て、沈鬱ちんうつになつて頭を低たれ手を拱こまねいて黙もくっている。

宇平がこの性質には、叔父も文吉も慣れていたが、今の様子はそれとも變つて来ているのである。朝ちよう夕せき平穩な時がなくなつて、始終興奮している。苛いら々いらしたような起居振舞たちいふるまいをする。それにいつものような発揚の状態になつて、饒おしやべり舌しをすることは絶えて無い。寧沈むしろ黙勝もくしょうだと云つても好い。只興奮しているために、

瑣細ささいな事にも腹を立てる。又何事もないと、わざわざ人を挑いどんでことばじり詞尻ことばじりを取つて、怒いかりの動機を作る。さて怒が生じたところで、それをあらわに発動させずに、口小言を言つて拗すねている。

こう云う状態が二三日続いた時、文吉は九郎右衛門に言つた。  
 「若檀わかだんな那の御様子はどうも変じやございませんか」文吉は宇平の事を、いつか若檀那と云うことになつていた。

九郎右衛門は気にも掛けぬらしく笑つて云つた。「若殿か。あの御機嫌の悪いのは、旨うまい物でも食わせると直るのだ」

九郎右衛門のこう云つたのも無理はない。三人は日ごとに顔を見合つていて気が附かぬが、困窮びようあと病痂びようあと鞆旅きりよとの三つの苦艱くげんを嘗なめ尽して、どれもこれも江戸を立つた日の俵おもかげはなくなつてい

るのである。

文吉がこの話をした翌日の朝であつた。相<sup>あい</sup>宿<sup>やど</sup>のものがそれぞれ<sup>かせぎ</sup>稼に出た跡で、宇平は九郎右衛門の前に膝<sup>ひざ</sup>を進めて、何か言い出しそうにして又黙ってしまった。

「どうしたのだい」と叔父が云つた。

「実は少し考えた事があるのです」

「なんでも好いから、そう云え」

「おじさん。あなたはいつ敵に逢えると思つていますか」

「それはお前にも分かるまいが、己<sup>おれ</sup>にも分からんのう」

「そうでしょう。蜘蛛<sup>くも</sup>は網<sup>い</sup>を張つて虫の掛かるのを待つています。

あれはどの虫でも好いのですから、平気で待つています。若し



一匹の極きまった虫を取ろうとするのだと、蜘蛛の網は役に立ちますまい。わたしはこうしてぎようこう僥倖ごうこうを当にしていつまでも待つのが厭いやになりました」

「随分己もお前も方々歩いて見たじゃないか」

「ええ。それは歩くには歩きましたが」と云い掛けて、宇平は黙った。

「はてな。歩くには歩いたが、何が悪かったと云うのか。構わんから言え」

宇平はやはり黙って、叔父の顔をじつと見ていたが、暫くして云った。「おじさん。わたし共は随分歩くには歩きました。しかし歩いたってこれは見附からないのがあたりまえ当あたりまえ前あたりまえかも知れません。

じつとして網を張っていたって、来て掛かりっこはありませんが、歩いていたって、打ぶつ附つからないかも知れません。それを先へ先へと考えてみますと、どうも妙です。わたしは変な心持がしてなりません」宇平は又膝を進めた。「おじさん。あなたはどうしてそんな平気な様子をしていられるのです」

宇平のこの詞を、叔父は非常な注意の集中を以て聞もいていた。

「そうか。そう思うのか。よく聴きけよ。それは武運つたなが拙たくて、神にも仏にも見放されたら、お前の云う通だろう。人間はそうした物ではない。腰たが起たてば歩いて捜す。病気になれば寝たていて待つ。神しんぶつ仏ぶつの加護があれば敵にはいつか逢あわれる。歩いて行き合うかも知れぬが、寝ている所へ来るかも知れぬ」

宇平の口角には微かな、嘲るような微笑が閃いた。「おじさん。

あなたは神や仏が本当に助けてくれるものだと思っっていますか」

九郎右衛門は物に動ぜぬ男なのに、これを聞いた時には一種の  
 気味悪さを感じた。「うん。それは分らん。分らんのが神

とけ  
 仏だ」

宇平の態度は不思議に恬然としていて、いつもの興奮の状態

とは違っている。「そうでしょう。神仏は分からねぬものです。実

はわたしはもう今までしたような事を罷めて、わたしの勝手にし  
 ようかと思っています」

九郎右衛門の目は大きく開いて、眉が高く拳がったが、見る見  
 る蒼ざめた顔に血が升って、拳が固く握られた。

「ふん。そんなら敵討は罷やめにするのか」

宇平は軽く微笑ほほえんだ。おこつたことのない叔父をおこらせたのに満足したらしい。「そうじゃありません。亀蔵は憎い奴ですから、若し出合つたら、ひどい目に逢わせて遣ります。だが捜すのも待つのも駄目ですから、出合うまではあいつの事なんか考えずにいます。わたしは晴がましい敵討をしようとは思いませんから、助太刀もいりません。敵が知れば知れる時知れるのですから、見識みしりにん人もいりません。文吉はこれからあなたの家来にしてお使下さいまし。わたしは近い内にお暇をいたす積です」

九郎右衛門が怒は発するや否や忽たちまち解けて、宇平のこの詞ことばを聞いている間に、いつもの優やさしいおじさんになっていた。只何事を

も強しいて笑じょうだん談だんに取りなす癖のおじが、珍めづらしく生真きまじめ面目めいもくになつていただけである。

宇平が席を起つて、木賃宿の縁側を降りる時、叔父は「おい、待て」と声を掛けたが、宇平の姿はもう見えなかつた。しかし宇平がこれきりいなくなろうとは、叔父は思わなかつた。

夕方に文吉が帰つたので、九郎右衛門は近所へ往つて宇平を尋ねて来いと云つた。宇平は折々町の若い者の象しょうぎ棋ぎをさしている所などへ往つた。最初は敵の手掛りを聞き出そうとして、雑談に耳を傾けていたのだが、後には只何となしにそこで話していたのである。文吉はそう云う家を尋ねた。しかしどこにもいなかつた。

その晩には遅くなるまで九郎右衛門が起きていて、宇平の帰るのを待ったが、とうとう帰らなかつた。

文吉は宇平を尋ねて歩いた序ついでに、ふと玉造たまつくり豊空ほうくう稲荷いなりの靈れいげ験けんの話はなしを聞いた。どこの誰たれの親の病気が直つたとか、どこの誰は迷子の居所を知らせて貰つたとか、若い者共が評判し合つていたのである。文吉は九郎右衛門にことわつて、翌日行水して身をきよ潔めて、玉造をさして出て行つた。敵のありかと宇平の行方とを伺つて見ようと思つたのである。

稲荷いなりの社やしろの前まへに来て見れば、大勢の人が出入でいりしている。数えられぬ程多く立ててある、赤い鳥居が重なり合つていて、群集はその赤い洞ほらの中うちで蠢うごめいているのである。外廻りには茶店が出来てい

る。汁粉屋がある。甘酒屋がある。赤い洞の両側には見せ物小屋やらおもちや店みせやらが出来ている。洞を潜くぐつて社に這入ると、神主がお初穂と云つて金を受け取つて、番号札をわたす。伺を立てる人をその番号順に呼び入れるのである。

文吉は持つていただけの錢を皆お初穂に上げた。しかし順番がなかなか来ぬので、とうとう日の暮れるまで待った。何も食わずに、腹が耗へつたとも思わずにいたのである。暮六くれむつが鳴ると、神主が出て「残りの番号の方は明朝お出いでなさい」と云つた。

次の日には未明に文吉が社へ往つた。番号順は文吉より前なのに、まだ来ておらぬ人があつたので、文吉は思ったより早く呼び出された。文吉が沙すなに額うづを埋めて拝みながら待っていると、これ

も思ったより早く、神主が出て御託宣を取り次いだ。「初の尋たずね人にんは春頃から東国の繁華な土地にいる。後の尋人の事は御託宣が無い」と云った。

文吉は玉造から急いで帰って、御託宣を九郎右衛門に話した。

九郎右衛門はそれを聞いて云った。「そうか。東国の繁華な土地と云えば江戸だが、いかに亀蔵が横着でも、うかと江戸には戻ってしまい。成程我々が敵討に余所よそへ出たと云うことは、噂に聞いたかも知れぬが、それにしても外の親戚も気を付けているのだから、どうも江戸に戻っていきそうにない。お前は神主に一杯食わされたのじゃないか。後の尋人が知れぬと云うのも、お初穂がもう一度貰いたいのかも知れん」



文吉はひどく勿体もったいながって、九郎右衛門の詞ことばを遮さへぎるようにして、どうぞそう云わずに御託宣ごたくせんを信ずる気になつて貰もらいたいと頼たのんだ。

九郎右衛門は云つた。「いや。己は稲荷様を疑ういはせぬ。只どうも江戸ではなさそうに思うのだ」

こう云つている所へ、木賃宿の亭主ていしゅが来た。今家いまえ主ぬしの所へ呼よばれて江戸から来た手紙を貰もらったら、山本様へのお手紙であつたと云つて、一封の書状を出した。九郎右衛門が手に受け取つて、「山本宇平殿おなじく、同九郎右衛門殿、桜井須磨右衛門、平安」と讀んだ時、木賃宿でも主従の礼儀を守る文吉ではあるが、兼て聞き知つていた後室こうしつの里からの手紙は、なんの用事かと気が急せいて、

九郎右衛門が披く手紙の上に、乗り出すようにせずにはいられなかつた。

敵討の一行が立った跡で、故人三右衛門の未亡人は、里方桜井須磨右衛門の家で持病の直るのを待った。暫くすると難儀に遭つてから時が立ったのと、四方が静になつたのとのために、頭痛が余程軽くなつた。実弟須磨右衛門は親切にはしてくれるが、世話にばかりなつてもいにくいので、未亡人は余り忙しくない奉公口をと云つて捜して、とうとう小川町 俎 橋 際 の高家衆大沢右京大夫基昭が奥に使われることになつた。

宇平の姉りよは叔母婿原田方に引き取られてから、墓参の時な

どには、櫛しきみを売る媪うばの世間話にも耳を傾けて、敵のありかを聞き出そうとしていたが、いつか忌いみも明けた。そこで所々しよしよに一二箇月ずつ奉公していたら、自然手掛りを得るたつきにもなろうと思いついて、最初は本所の或る家に住み込んだ。これは遠い親戚に当るので、奉公人やら客分やら分からぬ待遇を受けて、万事の手伝をしたのである。次に赤坂の堀と云う家の奥に、大小母おおおばが勤めていたので、そこへ手伝に往った。次に麻布あざぶの或る家に奉公した。次に本郷弓町の寄合衆よりあいしゆう本多帯刀たてわきの家来に、遠い親戚があるので、そこへ手伝に往った。こんな風に奉公先を取り替えて、天保六年の春からは御茶の水の寄合衆酒井亀之進かめのしんの奥に勤めていた。この酒井の妻は浅草の酒井石見守忠ただみち方の娘である。

未亡人もりよも敵のありかを聞き出そうと思つていて、中にもりよは昼夜それに心を砕いていたが、どうしても手掛りがない。九郎右衛門や宇平からは便たよりが絶たえだえ々になるのに、江戸でも何一つしでかした事がない。女子達おなごの心細さは言おう様がなかつた。

月日が立つて、天保六年の五月の初になつた。或る日未亡人の里方の桜井須磨右衛門が浅草の観音に参詣して、茶店に腰を掛けていと、今まで歇やんでいた雨が又一しきり降つて来た。その時茶店の軒へ駆け込んで雨を避ける二人連づれの遊あそび人にんてい体の男がある。それが小降になるのを待ちながら、軒に立つてこんな話をした。

一人が云つた。「お前に話そうと思つて忘れていたが、ゆうべの事だつた。丁度今のように神田で雨に降り出されて、酒問屋さかどい屋

の戸の締っている外でしやがんでいると、そこへ駆け込んだ奴がある。見れば、あの酒井様にいた亀じゃあねえか。己はびつくりしたよ。好くずうずうしく帰って来やがったと思いなから、おい、亀と声を掛けたのだ。すると、えと云って振り向いたが、ひとちが人違えをしなさんな、おいらあ虎とらと云うもんだと云つといて、まだ雨がどしどし降っているのに、駆け出して行つてしまやがった」  
 今一人が云つた。「じゃあ又帰つていやがるのだ。太ふてえ奴だなあ」

須磨右衛門は二人に声を掛けて、その亀と云う男は何者だと問うた。二人は侍にただ糺されるのをひどく当惑がる様子であったが、おとどしの暮に大手の酒井様のお邸で悪い事をして逃げたちゆうげ仲

間んの亀蔵の事だと云った。そして最後に「なに、ちよいと見たのですから、全く人違で、本当に虎と云うものだったかも知れません」と詞を濁した。只見掛けたと云うだけのこの二人を取り押さえても、別に役に立ちそうではなく、又荒立てて亀蔵に江戸を逃げられてはならぬと思つて、須磨右衛門は穩便に二人を立ち去らせた。

大阪で九郎右衛門が受け取つたのは、桜井から亀蔵の江戸にすることを知らせて遣やつた手紙である。

文吉はすぐに玉造へお礼参まいりに往つた。九郎右衛門は文吉の帰るのを待つて、手分をして大阪の出口々々を廻つて見た。宇平の行方を街道の駕籠かごの立場たてば、港の船問屋ふなどいやに就ついて尋ねたのである。

しかしそれは皆徒勞であつた。

九郎右衛門は是非なく甥おいの事を思い棄てて、江戸へ立つ支度を  
した。路銀は使い果しても、用心ようじんきん金と衣類腰の物には手は着  
けない。九郎右衛門は花色木綿の単物ひとえものに茶小倉の帯を締め、  
紺麻こんあさがすり緋ひの野羽織を着て、両刀を手挟たばさんだ。持物は鳶色とびいろごろ  
ふくの懐中物、鼠木綿ねずみもめんの鼻紙袋、十手早繩はやなわである。文吉も取  
つて置いた花色の単物に御納戸おなんど小倉の帯を締めて、十手早繩を懐  
中した。

木賃宿の主人には礼金を遣り、摂津国屋へは挨拶あいさつに立ち寄つ  
て、九郎右衛門主従は六月二十八日の夜船で、伏見から津へ渡つ  
た。三十日に大暴風おおあらしで阪の下に半日留められた外は、道中なん

の障さわりもなく、二人は七月十一日の夜品川に着いた。

十二日寅とらの刻に、二人は品川の宿を出て、浅草の遍立寺へんりゅうじに往つて、草鞋わらじのまままで三右衛門の墓に参つた。それから住持に面会して、一夜旅ひとよの疲を休めた。

翌十三日は孟蘭盆会うらぼんえで、親戚のものが墓参に来る日である。九

郎右衛門は住持に、自分達の来たのを知らせてくれるなど口止をして、自分と文吉とは庫裡くりに隠れていた。住持はなぜかと問うたが、九郎右衛門は只ばかりごと「謀は密なるをとうとぶと申しますからな」と云つたきり、外の話にまぎらした。墓参に来たのは原田、桜井の女房達で、厳きびしい武家奉公をしている未亡人やりよは来なかつた。



戌いぬの下刻になつた時、九郎右衛門は文吉に言った。「さあ、これから捜しに出るのだ。見附けるまでは足を摺すり粉木こぎにして歩くぞ」

遍立寺を旅支度のまままで出た二人は、先ず浅草の観音をさして往つた。雷門近くなつた時、九郎右衛門が文吉に言った。「どうも坊主にはなつておらぬらしいが、どんな風ふう体ていでいても見逃みのががすなよ。だがどうせ立派なりな形かたちはしていないのだ」

境けい内だいを廻めぐつて、観音を拝をんで、見識みしり人にんを桜井に逢あわせて貰もらつた礼れいを言いつた。それから蔵くら前まえを両国へ出た。きようは蒸暑むしあついのに、花火があるので、涼すず旁みかた見物みぶつに出た人が押し合あつていいる。提ちよう灯ちんに火ひを附つける頃ころ、二人は茶店で暫しばく休やすんで、汗あせが少すく

し乾くと、又歩き出した。

川も見えず、船も見えない。玉や鍵かぎやと叫ぶ時、群集うなじが項せを反らして、群集の上の花火を見る。

酉とりの下刻と思われる頃であった。文吉が背後うしろから九郎右衛門の袖を引いた。九郎右衛門は文吉の視線たどを辿たどつて、左手一步前を行く背の高い男を見附けた。古びた中形ちゆうがた木綿ひとえものの単物ひとえものに、古びた花色縞博多しまはかたの帯を締めている。

二人は黙つて跡を附けた。月の明るい夜である。横山町を曲る。  
 塩しおちよう町おおでんまちようから大伝馬町おおくちようがしに出る。本町を横切つて、石町河岸いしきちがしから龍閑橋りゆうかんばし、鎌倉河岸かまくらがしに掛る。次第に人通が薄らぐので、九郎右衛門は手拭を出して、頬ほお被かぶりをして、わざとよろめきながら

歩く。文吉はそれを扶ける振をして附いて行く。

神田橋外元護寺院もとごじいん二番原に來た時は丁度子の刻頃であつた。往來はもう全く絶えている。九郎右衛門が文吉に目ぐわせをした。二つの体を一つの意志で働かすように二人は背後うしろから目ざす男に飛び着いて、黙つて両腕をしつかり攫つかんだ。

「何をしやあがる」と叫んだ男は、振り放そうと身をもがいた。無言の二人は釘くぎぬき拔で釘を挟んだように腕を攫んだまま、もがく男を道みちばた傍の立木の蔭へ、引き摩ずつて往つた。

九郎右衛門は強烈な火を節光板で遮つたような声で云つた。

「己はおとどしの暮お主に討ぬしたれた山本三右衛門の弟九郎右衛門だ。国所くにところと名前を言つて、覺悟をせい」

「そりやあ人違だ。おいらあ泉州産せんしゅううまれで、虎蔵と云うものだ。そんな事をした覚おぼえはねえ」

文吉が顔を覗のぞき込んだ。「おい。亀。目の下の黒痣ほくろまで知つて  
いる己がいる。そんなしらを切るな」

男は文吉の顔を見て、草葉が霜しもに萎しおれるように、がくりと首を  
低たれた。「ああ。文公か」

九郎右衛門はこれだけ聞いて、手早く懐中から早縄を出して、  
男を縛つた。そして文吉に言った。「もうここは好いから、お茶  
ノ水の酒井亀之進様のお邸へ往つてくれ。口上はこうだ。手前は  
御家のお奥に勤めているりよの宿許やどもとから参りました。母親が  
霍乱かくらんで夜明よあけまで持つまいと申すことでござります。どうぞ格別

の思おぼしめし召めいでお暇を下さつて、一目お逢わせ下さるやうにと、そ  
う云うのだ。急げ」

「は」と云つて、文吉は錦にしきちょう町ちやうの方角へ駆け出した。

酒井亀之進の邸では、今宵奥こよいのひげが遅くて、りよはようよう  
部屋に帰つて、寝巻に着換えようとしている所であつた。そこへ  
老女の使が呼びに来た。

りよは着換えぬうちで好かつたと思ひながら、すぐに起つて上う  
草履わぞうりを穿はいて、廊下ぶつたい伝たいに老女の部屋へ往つた。

老女は云つた。「お前の宿から使が来ているがね、母親が急病  
だと云うことだ。盆ではあり、御多用の所だが、親の病氣は格別

だから、帰ってお出<sup>いで</sup>。親御に逢つたら、夜でもすぐにお邸へ戻るのだよ。あすになつてから、又改めてお暇を願つて遣るから」

「難<sup>ありがと</sup>有うございます」と、りよはお請<sup>うけ</sup>をして、老女の部屋をすべり出た。

りよはこのまま往つても好いと考えながら、使とは誰が来たのかと、奥の口へ覗きに出た。御用を勤める時の支度で、木綿中形の単物に黒<sup>くろ</sup>縷<sup>じゆす</sup>子の帯を締めていたのである。奥の口でりよは旅支度の文吉と顔を見合せた。そして親の病気が口実だと云うことを悟つた。

りよと一しよに奥を下がつた傍<sup>ほう</sup>輩<sup>ばい</sup>が二三人、物珍らしげに廊下に集まつて、りよが宿の使に逢うのを見ようとしている。

「ちよいと忘物をいたしましたから」と、りよはひとりごと 独言のよう  
に云つて、足を早めて部屋へ引き返した。

部屋の戸を内から締めたりよは、葛籠つづらの蓋ふたを開けた。先ず取り  
出したのは着換の帷子かたびら一枚である。次に臂ひじをずっと底までさし  
入れて、短刀を一本取り出した。当番の夜父三右衛門が持つてい  
た脇差である。りよは二品を手早く袱紗ふくさに包んで持つて出た。

文吉は敵を掴まえた顛末てんまつを、途中でりよに話しながら、護ご  
持院原んがはらへ来た。

りよは九郎右衛門に挨拶して、着換をする余裕はないので、短  
刀だけを包の中から出した。

九郎右衛門は敵に言った。「そこへ来たのが三右衛門の娘りよだ。三右衛門を殺した事と、自分の国所名前をそこで言え」

敵は顔を挙げてりよを見た。そして云った。「わたしもこれまでだ。本当の事を言います。なる程山本さんにきず創を附けたのはわたしですが、殺しはしません。勝負事に負けて金に困ったものですから、どうかして金を取りたいと思つて、あんなへまな事をしました。わたしは泉州生田郡いくたごおり上野原村の吉兵衛と云うものきちべえの倅で、名は虎蔵と云います。酒井様へ小使に住み込む時、勝負事しりあで識しりあ合いになつていた紀州の亀蔵と云う奴の名を、口から出任せに言つたのです。この外に言うことはありません。どうぞ御存分になすつて下さい。」



「好く言った」と九郎右衛門は答えた。そしてりよと文吉とに目ぐわせして虎蔵の縄を解いた。三人が三方からじりじりと詰め寄った。

縄をほどかれて、しよんぼり立っていた虎蔵が、ひよいと物をねらう獣のように体をまえかがみ前屈にしたかと思うと、突然りよに飛び掛かって、押し倒して逃げようとした。

その時りよは一步下がって、柄つかを握っていた短刀で、抜打に虎蔵を切った。右の肩かたさき尖から乳へ掛けて切り下げたのである。虎蔵はよろけた。りよは二太刀三太刀切った。虎蔵は倒れた。

「見事じゃ。とどめは己が刺す」九郎右衛門は乗り掛かってのど吭を刺した。

九郎右衛門は刀の血を虎蔵の袖で拭いた。そしてりよにも脇差を拭かせた。二人共目は涙ぐんでいた。

「宇平がこの場に居合せませんのが」と、りよは只一言云った。

九郎右衛門等三人は河岸かしにある本多伊予守頭取いよのかみとうどりの辻番所つじばんしよに

届け出た。辻番組合月番にしまるおこなんどうどのきちのじよう西丸御小納戸にしまるおこなんどうどのきちのじよう鶴殿吉之丞つるどのきちのじようの家来玉木勝

三郎組合の辻番人が聞き取った。本多から大目附に届けた。辻番

所組合遠藤たじまのかみたねのり但馬守胤統ただのりから酒井忠学ただのりの留守居へ知らせた。

酒井家は今年四月に代だいがわり替かがしているのである。

酒井家から役人が来て、三人の口書くちがきを取って忠学に復命した。

翌十四日の朝は護持院原一ぱいの見物人である。敵を討った三

人の周囲へは、山本家の親戚が追々馳せ附けた。三人に鵜殿家から鮎すしと生菓子なまがしとを贈った。

酉とりの下刻に西丸目附徒士頭かちがしら十五番組水野采女うねめの指図で、西丸

徒士目附永井亀次郎、久保田英次郎、西丸小人目附平岡唯八郎ただはちろう、

井上又八、使之者つかいのもの志母谷金左衛門、伊丹長次郎いたみ、黒鍬之者くろくわのもの四人

が出張した。それに本多家、遠藤家、平岡家、鵜殿家の出役しゅつやく

があつて、先ず三人の人体にんてい、衣類、持物てきず、手創てきずの有無ゆうむを取り調

べた。創は誰も負っていない。次に永井、久保田両徒目附かちに当て

た口書を取った。次に死骸の見分けんぶんをした。酒井家に奉公した時

の亀蔵の名を以て調書に載せられた創はこうである。「背中左ひだり

之方のほう一寸程突創つききず一箇所、創口腫上はれあがり深さ相知あひしれまをさず不申、領えり

に切創きりきず一箇所、長さ三寸程、深さ二寸程、同所下之方しものほうに切創一箇所、長さ一寸五分程、深さ六分程、左耳之脇わきに切創一箇所、長さ一寸、深さ六分程、右之肩より乳へ掛け一尺程切創一箇所、深さ四寸程、同所脇肩に切創一箇所、長さ二寸、深さ一寸程、咽のど突創一箇所、長さ三寸程、都合七箇所」衣類は木綿単物、博多帯、持物は浅葱手拭一筋である。死骸しかいは玉木勝三郎に預けられた。次に呼び出されていた、亀蔵の口入人神田久右衛門町代地富士屋治三郎、同五人組、亀蔵の下請宿若狭屋亀吉が口書を取られた。次に九郎右衛門等の届を聞き取った辻番人が口書を取られた。

見分の役人は戌いぬの上刻に引き上げた。見分が済んで、鵜殿吉之丞から西丸目附松本助之丞へ、酒井家留守居庄野慈父右衛門から

酒井家目附へ、酒井家から用番大久保かがのかみただぎね加賀守忠真へ届けた。

十五日卯うの下刻に、水野采女の指図で、庄野へ九郎右衛門等三人を引き渡された。前ぜんばん晩酉の刻から、九郎右衛門とりよとを載せるために、酒井家でさし立てた二挺ちようの乗物は、辻番所に来て控えていたのである。九郎右衛門、文吉は本多某に、りよは神戸に預あずけられた。

この日酉の下刻に町奉行筒井伊賀守政憲つついがかみまさのりが九郎右衛門等三人を呼び出した。酒井家からは目附、下目附、足軽小頭に足軽を添えて、乗物に乗った二人と徒歩かちの文吉とを警固した。三人が筒井政憲の直じきの取調を受けて下がったのは戌の下刻であった。

十六日には筒井から再度の呼出が来た。酉の下刻よりきにすぎに与力仁杉八

右衛門の取調を受けて、口書を出した。

この日にりよは酒井龜之進から、三右衛門の未亡人は大沢家から願に依つて暇を遣された。りよが元の主人細川家からは、敵討の祝儀を言つてよこした。

十九日には筒井から三度目の呼出が来た。九郎右衛門等三人は口書下書を読み聞せられて、酉の下刻に引き取つた。

二十三日には筒井から四度目の呼出が来た。口書清書に実印、爪印をさせられた。

二十八日には筒井から五度目の呼出が来た。用番老中水野越前守忠邦ただくにの沙汰で、九郎右衛門、りよは「奇特之儀きどくのぎに付構なし」つかまひ文吉は「仔細無之構なし」と申し渡された。それから筒井の褒ほ

詞うしを受けて酉の下刻に引き取った。

続いて酒井家の大目附から、町奉行の糺きゆうめい明が済んだから、

へいじようのとほりこころう

「平常通心得べし」と、九郎右衛門、りよ、文吉の三人

に達せられた。九郎右衛門、りよは天保五年二月に貰った御判ごはんも

物の大目附に納めた。

うるう

閏七月朔日ついたち

にりよに酒井家の御用召があつた。辰たつの下刻に親

戚山本平作、桜井須磨右衛門が麻あさがみしも上下で附き添つて、御用部屋

に出た。家老河合小太郎に大目附が陪席して申渡もうしわたしをした。

によしよう

「女性によしようなれば別して御賞美あり、三右衛門の家名相統被仰おほせつ

けらる、

あておこなひ

宛行ふちくだしおかる十四人扶持被下置、追て相応の者婿養子可むこようしおほせつ

被仰附、

又近日

なかおくおめみえおほせつけらるべし

中奥御目見可被仰附」と云うのである。

十一日にりよは中奥目見なかおくめみえに出て、「御紋附黒縮緬くろちりめん、紅裏もみうら

真綿添まわたそひ、白羽二重しろはふたへひとかさね一重」と菓子一折とを賜たまつた。同じ日に

浜町の後室から「縞縮緬しま一反」、故酒井忠質ただたかしつせんじゅいん室專むらみ寿院から

「高砂染縮緬たかさざ帛二ふくさ、扇二本、包之内つつみのうち」を賜つた。

九郎右衛門が事に就いては、酒井忠学から家老本多意気揚いきりへ、

「九郎右衛門は何の思おぼしめし召これなくも無な之な、以前いぜんのとほりめしいだすべし、

且行届候段満足褒美可致かつゆきとどきそろだんまんぞくほうびいたすべし、別段之思召を以て御紋附麻あ

上下被下置さがみしもくだしおかる」と云う沙汰があつた。本多は九郎右衛門に百石

遣つて、用人の上席にした。りよへも本多から「反物代千疋たんものだいせんびき」

を贈り、本多の母から「縞縮緬一反、交肴まぜさかなひとをり一折」を贈つた。

文吉は酒井家の目附役所に呼び出されて、元表小使、山本九郎



右衛門家来と云う資格で、「格段骨折奇特に附、小役人格に被めしかかへらるかへらる、御宛行金四両二人扶持被下置」と達せられた。それから苗字を深中と名告つて、酒井家の下邸巢鴨すがもの山番を勤めた。

この敵討のあつた時、屋代太郎弘賢ひろかたは七十八歳で、九郎右衛門、りよに賞美の歌を贈つた。

「又もあらし魂祭たままつ祭まつるてふ折に逢ひて父兄の仇討あたうちしたぐひは」  
幸さいわいに太田七左衛門が死んでから十二年程立っているので、もうパロヂイを作つて屋代を擲からか揄うものもなかつた。



# 青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年5月30日発行

1985（昭和60）年6月10日41刷改版

1990（平成2）年5月30日53刷

入力：砂場清隆

校正：菅野朋子

2000年10月17日公開

2006年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 護持院原の敵討

## 森鷗外

2020年 7月12日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>